



木村琢磨(編)

もう困らない! 高齢者診療でよく出合う問題とその対応

—検査や治療はどこまで必要? 患者・家族に満足してもらうには?

外来・病棟・在宅・施設ですぐに役立つ実践ポイント

地域医療振興協会 揖斐郡北西部地域医療センター

吉村 学

本書はとてもユニークで実践的な本である。高齢者診療に関わる「場」は外来、病棟、救急室、在宅、施設である。医師の修練の場の中心は今もなお病棟と外来が主だ。しかしこの執筆陣の医師らは全ての「場」をカバーしている点ですごいし、同じ医師がその「場」を高齢者の患者さんと共に動いて診療しているからこそ見えてくる「風景」をしっかりと描いている。現代医療の最大の弱点である Fragmentation (細分化) の弊害を乗り越える1つのカギはこういうタイプの医師の登場であると思う。編者の木村先生をリーダーとする多職種の医療チームがこれまで積み重ねた「高齢者の臨床に伴うさまざまな論点に関する勉強会」で絞り出してきた臨床的な英知 Clinical wisdom をこの本により享受できるのはとてもありがたい。

従来の教科書にはない切り口が随所に見られる。症例をコンパクトに提示して、そこで悩むことから毎回始まっている。あるある、そうそうと何度も頷いてしまった。107例の豊富な事例、執筆者が実に多彩で医師だけでなく看護師、栄養士、理学療法士などによって書かれている点も斬新である。特に多職種から医師へ寄せられたメッセージは身につまされる。「医師」という役割と、他からはこのように見られているのだと自覚するのにとても役に立つ。各論のトピックも「ケアワーカーからの“夜騒ぐ、眠らない”という訴えへの対処」とか「予後予測の重要性と困難性」など実践的で興味深い内容になっている。高齢者診療では往々にして「正解」がないことが多い。そのあたりの苦悩やつぶやきも本書ではいかんなく開陳してあり、それにより Process of Care (ケアのプロセス) を学ぶことができる。これ

は実際に行われている「場」でしか学べないものがあるが、その空気感は読むだけでも堪能できる。

EBM をしっかりと学ばれ、質的研究にも造詣の深い木村先生らしく、自分達の議論だけでなく「外のエビデンス」もしっかり押さえてある。しかも欧米のエビデンスだけでなく本邦のエビデンス、さらに看護・介護・社会学領域までを含んだ検索をなされており、非常に奥が深い。このスタイルは今後日本の高齢者診療をあらゆる場で展開するときの1つのひな型になると感じている。Put evidence into practice (診療の場にエビデンスを) という従来より提唱されていることをまさに実践されている。

「序」のなかでも述べられているように「医師のみで解決できないことが大前提である」ことを出発点にしている。その基盤の上に仕事をして多職種と連携して議論を重ねている。このような姿勢こそ真のプロフェッショナリズムであるし、それが全編を貫かれている。研修医や医学生の指導医にとっても会話形式の「第8章 症例カンファレンス」などはそのまま指導医のセリフとして使えるし、各論の部分もすぐ役立つのでありがたい。後期研修医にとってもポートフォリオ作成の1つのモデルになるし、この本を使った多職種合同勉強会をやるのも刺激的で面白いと思う。本文中にポイント、ピットフォール、具体的説明などのタグがしっかりとついている点も評価できる。医学生、研修医、医師のみならず多職種の皆さんにもぜひ手にとって学んでいただきたいと切に思う。

● B5判/276頁/定価4,500円+税/2012年/羊土社